

本のたぐいは、その製作事情を考慮に入れるならば、むしろ厳正な本文資料とはなり得ないと見るのが常識かも知れない。しかし『うつほ物語』に「絵詞」と呼ばれる他の物語には類を見ない特殊な詞章が挿入されているからには、直接の結びつきは望めないまでも、絵巻や絵入本は、見方によっては興味ある資料となりうるし、何よりもこの物語の享受面での好資料であることは確かであろう。本書に、絵巻、奈良絵本、万治版本など、絵入本を多く収載することを心がけたのも、そのような面での資料的意義を考えてのことである。巻末の二書『空物語玉琴』と『宇都保物語年立』は広く流布した版本で、写真にするほどの書物ではないが、この物語研究の出発点ともなるべき基礎資料として付載した。また巻頭の口絵に用いた『実隆公記』の紙背文書は、『うつほ物語』の伝来に関わる重要資料と考えられるものである。

『うつほ物語』が、一応は『源氏物語』以前の現存唯一の長編物語と評価されながらも、その研究は今もって未開拓の部分が多く、評価や文学史上の位置付けも、まだ明確に示されるまでには至っていない。長編物語として見事な達成を遂げた『源氏物語』のさまざまな疑問を解くためにも、その鍵は多くこの『うつほ物語』の中に秘められていると思われる。本書が前著『うつほ物語の研究』に紹介した諸資料とともに、今後のこの物語の研究にいささかでも寄与するところがあれば、編者の喜びこれに過ぎるものはない。

目次

うつほ物語絵巻	三卷	5
奈良絵本うつほ物語	十冊	61
奈良絵本うつほ物語	五冊	147
写本うつほ	一冊	275
写本うつほ物語	一冊	335
古活字版うつほ物語	二冊	383
万治版うつほ物語	三冊	429
空物語玉琴	二冊	483
宇都保物語年立	一冊	533

